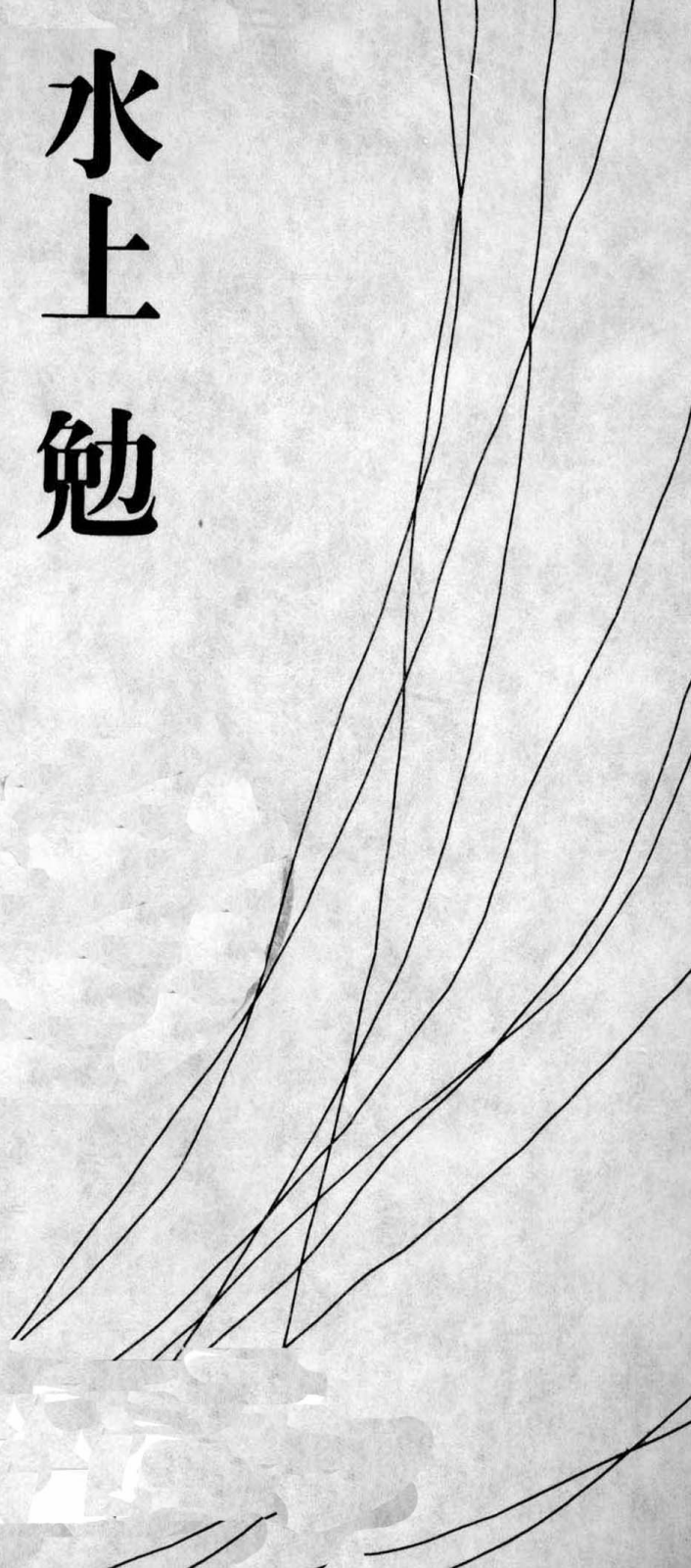


水上勉

わが華燭

水上勉

わが華燭



わが華燭

定価 四五〇円

昭和四十六年二月二十五日第一刷

著者 水上勉

装幀 丹阿弥丹波子

発行者 角田秀雄

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社 東京・名古屋
大阪・北九州

目次

わが華燭

わが華燭

もう一つの華燭

愛としあわせと

愛としあわせと

農山村の嫁たち

母性よ何処へゆく

うちの犬

うちの犬

京女の魅力

冬しぐれ

日本のべに

等持院と円光寺

162 158 155 150 145

129 118 111

24 7

土くれ散筆

木挽き話

葬式考

日本の雪

高校卒業生諸君

不合理生活の楽しさ

老桜に春なき国

自動車原罪論

競合衰弱の世相

田園への憧憬

この五人のさむらいたち

造反坊主の帰洛

地獄の季節

あとがき

わ
が
華
燭

わが華燭

娘が嫁にいつてしまつて、淋しかありませんか、お嬢さんに取られたような気がしませんか、あなたの場合は、格別かわいがつて育てなされたお嬢さんだからとくべつな気持でしょう。いろいろなぐさめてくれる人がいる。そのたびに返事にまごついて黙るしかない。たしかに、昨日までいた娘が、他家へいつてしまうのだから淋しさはあるが、しかし、同情されねばならないほどのこともないのだ。べつに、婿に娘を取られたという気もしていない。正直いつて、いつかはこの日はくると思つていたのだし、いまは、いなくなつて、落ちついた気持である。元來、私は実生活上、骨肉に対して冷淡な方かもしれない。小さくして母と別れて暮したので、孤独に馴れている。娘や家の者が、いつも周囲にべたついているとやりきれない方だし、旅にもよく出る。それほど、娘と格別愛情をもちつつ生きた時間もないのである。

多少事情のちがつた子ではある。三つで実母と別れた。その別れも、私に責任があつて、このこ

とは、『凍てる庭』にも書いたことなので、説明ははぶくが、かんたんにいえば、私と娘は捨てられた。終戦の翌年にうまれてから三つといえば、昭和二十四年である。おむつがとれたばかりだった。私の妻は、この娘を捨てて、べつの男のところへ走った。

事情はまああの当時の混乱をのりきれずに夫婦別れた若い人たちのケースに似ている。戦争中代用教員をし、終戦になり、すぐ上京して、焼野力原の神田の封筒工場の二階に住んで、再起をはかったが、闇をやらねばたべていけない飢餓地獄の生存競争についてゆけず、クソまじめなことをいってお粥をすすってばかりいた。

正直者が損を見る世の中をぶつぶついいつつ、すぐつぶされてしまう中小企業の出版企業の出版社を転々していたわけだが、何につけ派手好みだった妻は共稼ぎを主張、キャバレーにつとめ、そこで知りあった男と通じて、子がようやく乳ばなれして、おむつをしなくてすむようになるころを見はからって、家出している。ふられた父と娘は当時、浦和の農家のはなれにいたが、私は失業中であつた。

逃げた妻をさがして、妻の知人や、キャバレーの支配人の家までたずね歩き、はては妻とねんごろだったという客の住所までしらべて、気違いのように探しまわった記憶は今日もなまなましい。結局、妻は逃げおおせて、二年後に姿をあらわしたが、再会は日比谷の家庭裁判所だった。当時流行の協議離婚というヤツで、理由として、私の生活力の脆弱、性格の不一致があげられている。

裁判官の名は忘れたけれど、もうこの夫婦はどうついでみてもとへおさまらぬ割れ鍋と判断されたか、五つの子は父親が育てるべし、と判決を下し、妻は、望みを達して、身軽になって第二の人生へ出ていった。

子は早生れだったので、数え年七歳で入学だった。私は子を養育することの苦しさに耐えかねて、若狭の父母にあずけた。いまでも、おぼえているけれど、子をあずけた時、護国寺前のアパートへ、逃げた妻方の母親が怒鳴りこみにきた。あんたに子をわたしたのは、あんたが手許で養育してくれると思ったからで、まさか、日本海辺の、あの落っこちそうな便所壺のある百姓家へあずけようとは思わなかった。そのぐらいなら、わたしが養育したものを……もつともこれは、次の男へ走った女のさしがねにちがいなかったが、私は、鬼畜のようにいわれるのをがまんした。男手で子を、学校へやるということはなまなかのことでは出来なかった。私の原稿はその頃、そんなに売れもしなかった。ある日などは、アパートに子に留守させて、持ち込み原稿にゆき、帰ってくると、子はひるのうちにハシカにかかって寝ていた。床もとらずに、畳の上で高熱をだして死んだように寝ているのを見て、私は戦慄した。若狭は貧しいながら百姓をしている。子のたべるぐらいの米もあろう。便所壺はなるほど、おそろしい。子は用便のたびに恐怖をおぼえするだろうが、私の母にしてみれば、孫である。かわいがって育ててくれようと、二月だったか、入学の年の冬にランド

セルと本を買って、子に背負わせ、私はふたりで夜汽車で出発した。

子は、結局、いまの妻がきた五年後に、私の手許へもどったが、若狭でくらしした五年間の思い出を今日も自分の人生でもっとも忘れがたく、なつかしい農村生活だったとして大事にしてくれているようだ。私も、もちろん、子を離してからは、年に一度ぐらいいは顔を見に帰ったし、成長してゆく子を見て、ふしだらな東京での生活を、一步一步建て直す氣持になっていった。

酒が好きだった私は、才能のなくせして小説家になろうとしていた。毎日、文学文学といって酒ばかりのんでいた。女が逃げていった理由も一つはこの酒にある。子をあずけ、それで、すぐ改心するどころか、独り身になったのをよいことに羽をのばして、そこらじゅうの町の女を漁って酔い狂い、地べたで夜をあかした。だが、とにかく、そのような奈落から一日一日私は眼ざめていったようだった。いまの妻のくる頃は、洋服の行商人になっていたが、幼稚園の教師だったこの妻は当時二十一歳。世話する人があって、私のところへ、まるで鳥のようにころげこんできた。私は、女学生のようにだった妻を家に入れたが、ひそかに、若狭にいる娘を、どのように納得させようかと苦しまねばならなかった。

妻は子に会わせよ、といった。で、家に来た年にふたりで若狭へ帰った。妻も私も五年生になった子を見て涙ぐんだ。三日ほどの旅行ながら不思議と、子は妻を「お姉ちゃん」とよんで、よくなつくのだった。父親のつれ帰った若い女を見て、母に捨てられた子の心があたたまったのである。

私は意を決して、子を東京へつれ戻すことにした。若狭の祖母は、せめて六年生を出てからにしてくれ、といったが、妻がきかなかった。どうせ一しよに暮さねばならぬものなら、早い方がよい。一軒家を早く求めて親娘三人水入らずで暮そう。私たちは、やがて松戸市の畑の中の一軒家を見つけて、そこで新生活をはじめた。子は松戸の中学へ通い、高校へ通い、そうして、まもなく、東京へ越せる余裕ができて、豊島区要町から大学へ入った。

その間、いまの妻は、お姉ちゃんと言はれながら子の母代りとして、小学校からの父兄会へ列席した。いまから思うと、二十三歳の若妻が、よくPTAへ出てくれたものだと思う。余談ながら、娘がまだ小学生だった頃に、小石川の礪川校の同級生に野間宏氏のご子息がいて、父兄会ではよく野間夫人と顔をあわせた妻が、子にお姉ちゃんと言はれてはずかしかったといった。夫人にねんごろにしてもらった思い出は、今日もわすれられないといっている。

まあ、こんなぐあいでは、娘は、そんなにひねくれもせず、「お姉ちゃん」のもとで、成長してくれて、慶応大学を卒業し、成人となった。私はその間、いろいろな職もかえたけれど、どうやら、作家になっていた。『雁の寺』で直木賞をもらったのは、昭和三十五年だから、娘が十四歳の時である。ようやく文筆一本でくらしつてゆけるメドがついたというものの、それからは週刊誌や、新聞の殺到原稿をしゃにむにこなしているうちに、娘はしらぬまに高校、大学とすすみ、またたくまに

卒業していた。職業が孤独な個人作業だけに、家にいても、めったに顔をあわさず、書斎にとじこもっているのが私である。娘は娘で、大学へ出かけ、放課後は勝手に友だちとあそんだり、旅行したりして自分の人生を進みはじめ、この父娘は、世間でいうところの、いわゆる平和な団欒だんらんなど、たくらめばいつでも出来たはずなのに、お互い、心のうちで、それをがまんしつつ、今日を迎えたといえよう。一つは、「お姉ちゃん」とのあいだにうまれた子、娘にしてみれば、義妹であるが、その子が不運にも先天性の脊椎破裂ということもあって、「お姉ちゃん」に苦勞がふえ、その子の手術が三年もかかり、別府へつれて移住せねばならぬというような不慮の運に見舞われたことで、娘の人生は番狂わせを余儀なくされている。大学へ入ってから、おそらく娘は、父とも、「お姉ちゃん」とも、ゆっくり話しあう機会がなかったろうと想う。孤独な時間を抱きとめながら、娘はひとりで生きてきた。私にもし、苛酷なマスコミの仕事がなかったら、ゆっくり話しあえる時間もあったはずだが、つぎの子の手術代やら、世間なみな生活成長の時期である。文壇に出て、創作生活をする以上は、少なくともその仕事に自分でも充実感をおぼえ欲するままの作品を書きあげたいと念ずれば、家庭のことは第二、文学が第一である。別府へいった妻も障害の子も、さらに東京で孤独に暮す娘も、何もかもわすれて、私は、あてどない取材旅行の、旅の果てにいた。

娘が、きょう、嫁にゆくようになって、さぞかし、淋しいでしょう、婿に取られたような気持ちでしょう、といわれても、私がにが笑うしかないのは、このせいである。この父親は、もともと

と、そんなに、この娘と、あたたかくすごした一日などありはしない。私は近くにいながら遠くから見てきた。

娘が嫁にいくときまると、いろいろと週刊誌がきて、感想をのべてくれといった。たいがいはおことわりした。ところが『朝日新聞』だけに、私は随筆をかいた。その随筆は、ことわりきれない事情があった。というのは、依頼にきた記者が、私にとって故知の人であり、ドサ廻りといわれる地方支局に十幾年もいて、めでたく、東京づめになった初仕事だ、という。私は素朴なこの記者の、土着的で特徴のある顔を思い出しながら、次のような随想文をかいてしまった。

終戦の翌年にうまれた娘が二十四歳になって嫁にゆく。この娘は四つの時から母を知らず、よそとちよつと事情がちがうので、私の気持も複雑である。孤独と、淋しさと、喜びが三つ押しよせてきて、父親は妙な心境にある。

あの頃、この母親は飢えの地獄をもらい乳して歩いていた。私に闇物資を買う甲斐性がなかったからである。主食の欠配で乳がとまった。

代用教員だった私は職業上もあって気力のない男。とてもあの混乱期を要領よく生きる才覚はなかった。それに嫌気がさして、妻は進駐軍向けだったダンスホールが、日本人向けになったのを機

につとめはじめ、そこで男が出来、失業中の私と娘を捨てて逃げたのである。

あれから二十年たつ。子を故郷にあずけたり、ひきとったり、いろいろとやりながら、私はいまの妻をもらい、子をよびよせて、中学、高校、大学とゆかせ、世界旅行もさせて、養育のつとめを果たした。その娘が卒業してつとめた先で、すぐ恋愛して、お嫁にゆかせてくれという。

青年は二十七歳。給料は四万円。これから共稼ぎでやってゆくという。勇敢なこの男は、去年の夏、避暑地で仕事をしている私のところへ単身たずねてきて「娘さんをくれませんか」といった。みたところ、まあまあな男だ、いや、二十七歳は、私の子をうんだ年。終戦のあの地獄の年。私にくらべたら四万円の収入はみあげたもの。かりにことわっても、ひったくっていきそうな気配なので、よろこんでくれてやることにした。くれてやるというと、青年や娘は、ひっかかるかもしれぬが、くれてやるという気持はこっちにたしかにある。五十すぎた私の年で、あの頃闇の出来る才覚もなく、うろろうろするばかりだった若い父親たち、妻に逃げられた若い夫たち。読者の中にも、おられはしないかと思う。

戦争末期はうめよふやせよで、軽率な結婚をしたものの、子をうんですぐ終戦である。世の中はがらり変わり、女が威張って、終戦ボケの男は馬鹿にされた。女は闇成金に目をうばわれ、つまり、いまの経済動物のはしりは、闇市場をチューインガムかんで歩きはじめた女どもからはじまっている。頭の切りかえのおそい男たちは、町のつるしんばやで復員服を買い、私の場合は子を背負う